JFAの会長予定者選出に関する活動書類

（ふりがな）　なしまこうぞう

氏名：　田嶋幸三

※　本活動書類は、JFAのホームページ等で公開します

（1）提案する政策　　氏名　田嶋　幸三

現状に危機感を持ち、この2年間の活動を踏まえ、日本サッカー発展の基盤を確立し、5年後、10年後のさらなる発展のため、「JFA2005年宣言」の実現のために、必要と考えることを提案する。

1．日本サッカー協会の存在意義とサッカーの価値の向上、発信

2016/2017　　タウンミーティングにおいて「JFA2005年宣言」を今一度確認
47FA、9地域FAの標章、各種大会ロゴの統一等様々なブランディング

「JFA2005年宣言」の理念、ビジョン、ミッションステートメントを常に大切にしていく。
それを浸透させて、日々の活動の判断・行動の基準としていくことが、日本のサッカーの発展につながると確信している。ブランディングは、全国で日本サッカーのために働いてくださっている方々が日本サッカー協会につながっているという一体感を持つために、非常に効果的なものだと確信した。
今後は、このブランディングの統一と同時に、理念、ビジョン、ミッションステートメント、バリューをしっかりと伝え、浸透させていく。
日本サッカー協会は、国内で唯一のサッカーの統括団体であり、責任と誇りを協会の関係者に浸透させ、47都道府県協会を通じサッカーファミリー、それ以外の方々にも伝えていく。

2．将来に向けた47FAの自立的発展、活性化の推進

2016/2017　47FA還元金の変更、マーケティング強化、応援団活動、タウンミーティングの実施

従来は、JFAより様々な施策と補助金を下していく形で、受動的な要素が多かった47FAであったが、自立的発展を目指していき、そのことにより、日本サッカーの基盤のさらなる発展を目指す段階に来ていると考える。FAの特徴、資源に合わせ様々なアイディアを出し、JFAの施策をFAに適合した形で実施し、能動的に発展をデザインして実行していくことを、JFAとしてサポートしていく。
JFAは、すべてのサッカーファミリーを、土台となって支える立場としての役割を担う。

① 47FA還元金の変更
47FAの自立的発展を促進するため、2017年より還元金制度を改革した。2018年も同様に行う。
自立的発展の最初の一歩として、マーケティングを強化してもらうべく、講習会を実施。FA応援団がマーケティングのサポートをし、すぐにその成果が見え始めたところもある。
また、還元金の算出に関し基準を設けて行ったが、今後精度を高くして、趣旨を正確に反映するものとしていく。

②施設整備のサポート

自立的発展のために、拠点となる施設整備は欠かせない。
従来からの補助金制度を整理し、それを情報として伝え、それを基に FA の状況に合わせてフットボールセンターの整備を進めていただけるよう動き出している。
日本サッカー協会の補助金だけではなく、政府、自治体、JSC、国土交通省等からの補助金も整理し、フットボールセンター建設にあたって活用できるものを有効活用し、FA と共に取り組んでいく。
できないケースに関しては、その原因を探り、各ケースと向き合って、行政とのつきあい等を含め、詳細なサポートをしていく。

② 予算
2018 年には、二巡目となる 1 億円 47FA＋被災地 3 県 5000 万ずつの 48.5 億円の積立、JFA ナショナルフットボールセンターの 40 億円の積み立てが終わる。また、JJP の 5 億円（一部は J リーグと協議の上サポートを継続）が終了する。それに伴い、2019 年からは新たな規模の事業が展開できるようになる。これによって、大きな事業を始めるチャンスとなる。そのためにも、FA の状況に合わせたサポートをしていく。

④様々な JFA 事業の FA での開催
国際親善試合、インターナショナルドリームカップ、フットボールカンファレンス、その他の様々な大会や指導者養成、トレセンの研修会等の JFA 事業を各 FA と協力して行っていく。そのことにより、FA の運営能力も高まり、そのノウハウも財産となって蓄積され、また地元のフットボールファミリーに様々な機会を提供することにより、FA の発展への刺激としていきたい。
FA で様々な企画・実施をしていくための人材交流をしていく。

⑤タウンミーティングの実施
2017 年よりタウンミーティングを実施し、FA 関係者ばかりでなく、現場の人、J クラブやサポーター、自治体、メディア等、より多くのステークホルダーから直接意見を聞けたこと、FA の関係者と共有できたことは非常に重要であった。JFA がやりたいこと、その趣旨がしっかり伝わっているか、非常に効果的に情報を収集することができた。例えばトレセン認定制度、女子の 4 種登録、全少大会の 8 人制等は、タウンミーティングによって多くの意見をいただき、誤解があることもわかり、すぐに 9 月 16 日に全国 U-12 年代会議を実施。四種委員長、女子委員長、ユースダイレクター／技術委員長に集まっていただき、しっかりと議論させていただいた。
残り 7FA を確実に実行し、すべての FA の意見を集約していく。
このように、問題となっているものをキャッチしすぐに解決していくことを今後も心がけていく。またこのタウンミーティングで得た様々なご意見は、JFA の運営にしっかりと反映させていく。

⑥9 地域協会
2016/2017　9 地域サッカー協会を JFA の主導のもと、法人化。事務総長の派遣
RDO（2 地域）の配置

9 地域サッカー協会を法人化し、事務総長の派遣等で、事務局機能の強化を図ってきた。今後に向けて、様々な課題が生じてきているが、それらを踏まえ、9 地域協会がどのようにあるべきか、地域によるニーズや状況に合わせ、日本サッカー協会のサポートの仕方を、9 地域協会の設置者である 47 都道府県協会とも連携して進めていく。
RDO を配置したことにより、各都道府県での 1 級審判員の育成を進める。

３．魅力ある代表

2016/2017　会長に就任以来に予選・本戦のあった男女のすべての代表カテゴリー、ビーチサッカーがワールドカップに出場。

SAMURAI BLUE が FIFA ワールドカップ 2018 ロシア大会出場権獲得
検証の実施、TSG の実施

日本代表が勝つことが、日本サッカーの普及、発展のあらゆる面に大きく影響することは間違いない。今回 SAMURAI BLUE が FIFA ワールドカップへの出場権を獲得した。ワールドカップでしっかり闘い成果が残せるよう、また、日本代表が常にワールドカップに出場し、「JFA2005 年宣言」の約束であるトップ 10 入り、そして優勝を目指せるよう、強化を進めていく必要がある。
三位一体を重視し、常に世界を基準として、世界の真剣勝負の場に出続け、発展に生かしていくことをサポートする。

代表とＪリーグは両輪である。
シーズン制移行の議論を行い、Ｊリーグにおいて、このタイミングでは見送るという結論に達した。事前に申し上げていた通り、この結論を尊重する。
レベルが高く魅力あるＪリーグの試合を展開するために、議論し実践する。
明確な役割分担を再確認し、JFA、Ｊリーグのそれぞれの役割をはたしていき、協力して魅力ある日本サッカーを作り上げていく。
日本代表監督とクラブチームの監督の連携を深めて協力していく。

①SAMURAI BLUE
ロシアワールドカップにおいて、今まで以上の成績を目指す。それに向けた可能な限りのサポートをしていく。

②東京２０２０
森保新監督を迎え始動した。AFCU-23 選手権がスタートとなる。そして 8 月に行われるアジア大会（インドネシア）に U-21 のチームで臨み、オリンピックに向けた強化を進める。
次世代の SAMURAI BLUE の底上げの意味でも非常に重要なチームであり、最大限のサポートをしていく。

③ U-20/17
次のワールドカップに必ず出場できるよう、国際経験をしっかりと積ませる。また、代表選手としての誇りや責任を若い世代から教育していく。

④女子
2016／2017　なでしこジャパンに高倉麻子新監督を迎え再スタート
2016年U-20, 17ワールドカップに出場しメダル獲得（3位、準優勝）
2017年U-19アジア選手権優勝、U-16アジア選手権3位で共に2018年ワールドカップ出場権獲得

1）なでしこジャパン
世界のトップトップと試合を重ね、現在のなでしこの位置を確認し、強化を進めてきている。
2018年はフランスワールドカップ2019予選となるアジアカップに臨む。必ず出場権を獲得し、2019年ワールドカップ、そして2020年東京五輪に向け、強化を進める。

2）U-17/20
予選を突破したことを踏まえ、ワールドカップで、1試合でも多く試合を経験しメダルを獲得、1人でも多くの選手をなでしこジャパンへ輩出していく。

3）FIFA女子ワールドカップ2023招致
FIFA女子ワールドカップ2023を招致することにより、代表強化をさらに進めるとともに、女子サッカーの大きな発展の推進を目指したプロジェクトを実施する。

⑤フットサル
2016/2017　ブルーノ・ガルシア新監督を迎え、再スタートを切った。
アジアインドアゲームスにU-25で出場し3位獲得。

2018年2月のアジア選手権を目指し、ワールドカップ出場権を獲得する。
北澤委員長を中心とし、U-20年代も含めた強化を進めていく。
Fリーグも含めたフットサルの普及、環境の向上を図る。
2020年ワールドカップ招致（愛知県）を支援し、それに向けた強化も進める。

⑥ビーチサッカー
2016/2017　アジア選手権を3位で突破し、ワールドカップに出場。

新監督を決定し、次のワールドカップに向けた準備に入る。
代表チームだけではなく、ビーチサッカーの普及も含めた総合的な施策を実施していく。

４．育成日本復活

2016/2017　　U-17, 20 が FIFA ワールドカップ出場（男女）
指導指針改訂、ユースダイレクター専任化（5FA）、トレセン認定制度開始

U-20 は 10 年ぶり、U-17 は２大会ぶりにワールドカップに出場した。大会前は優勝を狙える位置にいるのではないかという期待もふくらんで試合に臨んだ。内山監督、森山監督そして選手達は、出しうる限りの力を出し全力で戦った。しかしながら、点差以上に力の差があった。これは世界の真剣勝負の場に出て初めてわかることであり、もし出ないでいたら「我々のユースは一流である」と言い続けていたかもしれない。世界に出続けるという意味において、TSG の重要性を改めて感じた。

① 三位一体、世界大会からのフィードバック
三位一体をしっかりと機能させることが発展には欠かせない。あらためて重視する。
U-17、U-20 のフィードバックから、日本サッカーの育成のスタートラインを考え直す必要を感じた。改めて、世界の育成を学ぶと共に、U-10、12、14 年代の指導、選手選考の基準について議論する。そのために、男女とも、海外の育成現場から積極的に学んでいく。
すべての育成年代の指導者のレベルアップを図る。これにより、トレセンの KAIZEN を行い、47FA、J クラブ等と協力して、育成のレベルアップを図る。

②トレセンの充実
日本の育成を支えるシステムとして確立しているトレセンは、日本サッカーの宝であり、トレセンのより一層の充実を図っていく。プロになる選手、代表になる選手の経歴を調べても、全国の所属チームとともに都道府県協会の役割は大きなものであることは間違いない。
さらなる充実、質の向上を目指す上で、そこで働いている方々に敬意を表し、やっている人が報われ、やる気をもって臨めるような環境を整備していく。
以前のようにユースダイレクターの研修会を充実させることで、責任と喜びを感じて取り組んでいただけるようにしていく。また、47FAYD 専任化を進め、適任者がいる FA については専任化を促し、それに対する予算をしっかりとつけていく。
トレセン認定制度の趣旨を伝え、プレーヤーズファーストでトレセンシステム、その指導・環境を改善していくことに努める。

③ J クラブアカデミー
J クラブアカデミーに各年代で最も良い選手が集まっており、重要な育成機関である。JJP のいくつかのパートを継続しサポートしていく。
指導現場で日本代表コーチングスタッフとの連係を密にしていくことで世界基準の共有を図る。

④JFA アカデミー
静岡から福島へ帰還する準備をする。

設立当初の理念に立ち返り、本来の目的を達成すべく、ゼロからスタートするつもりでより良いものにする。

「世界基準」を合言葉にし、すべてのクラブや学校の指導現場で常に意識していく。

5．グラスルーツ　フットボールファミリーの拡大

2016/2017　　四種登録人口減少の分析、全国 U-12 年代会議の実施
小学校体育、中学校体育のサポート
補欠ゼロ、リーグ戦の KAIZEN
女子の普及の推進、普及コーディネーターの配置
障がい者サッカー連盟設立、障がい者サッカーのサポート
TOYOTA とのパートナーシップによる幼稚園、保育園の巡回指導プロジェクトの開始

「フットボールフォーオール」を合言葉とし、「グラスルーツなくして代表の強化なし」、この一貫したフィロソフィーを基に、日本サッカーのすそ野を広げていく。
特に、四種年代の登録数の減少を見過ごすわけにはいかない。様々な分析の結果をもとに施策を講じていく。

①登録人口減へのアプローチ
登録人口の減少は、日本サッカーにとって大きな問題であり、タウンミーティングでも大きく取り上げている。詳細な分析に基づき、積極的に施策を講じていく。
少子化自体を止めることはできないが、手をこまねいて見ていたくはない。四種の登録人数が減ってきていることを考えると、何よりもキッズ年代でしっかり種をまくことが大切であり、巡回指導をはじめとし、あらためてキッズの活動の充実を再度活性化させていく必要がある。
四種以外の年代についても、登録状況を分析し、ファミリー拡大の施策を講じていく。

② 登録制度の見直し
登録制度を、フィロソフィーをもって考え直す時にきている。登録をどのようにデザインするかは、根本的な考え方に基づくものである。登録制度の見直しを考え、移籍等がスムースにいくように考えなければならない。現行の登録制度を悪用し有利に活用しているケースのために、本来の目的から離れ移籍等に対しての足かせになっている現状がある。各種連盟、大会での規制もあり、様々な制限があるが、プレーヤーズファーストの観点から、いつでもどこでも誰でもが柔軟に自分に合った場でプレーできるような環境をつくっていく。
しっかりとしたフィロソフィーのもと、登録制度全体の見直しを考えるプロジェクトを立ち上げ、2019 年から実施する。
また、選手登録、審判登録、指導者登録をしている人の登録上のメリットを、充実させ、確実に実施

するとともに、明確に伝えていく。

③ 学校での指導の支援

学校の教員については別の項でも述べるが、教員の負担を減らす一方、教員をしながら自分の生活を削って指導活動に尽力している方々の労に報いられるよう、教育委員会、スポーツ庁、文科省とも連携していく。

学校体育でのサッカーについて、小学校体育サポートのプログラムのさらなる推進、中学校のプログラムにも取り組む。

④ 女子の普及

女子の登録は増加傾向にある。これは各 FA、連盟、クラブの皆さんの努力の賜物である。

日本協会としては、47 都道府県全体を考え、国体少年女子の部創設に舵を切り、日本体育協会との最終段階の調整を進めているところである。これは、全国で中学生年代に力を入れていただくことで、かねてより懸案であった女子の中学生年代の登録人口減少を解消し、女子サッカーの発展に、強化、育成、普及すべての面から関わる大きな施策である。中体連の加盟団体を増やし全国大会の開催を目指す。高体連女子ができて高校年代女子の登録数が増えている中、次に懸案の中学生年代の人口増、中学生年代の充実につなげていく。

また、普及コーディネーターにより各 FA での普及に具体的に取り組んでいく。

女子サッカーを取り巻く環境は、まだ十分ではない。トップリーグであるなでしこリーグも含めた、女子サッカー界の構造改革に着手する。そのためのサポートをする。

⑤男子シニア、女子レディース

シニアの登録人口も増加傾向にあり、さらに力を入れていくべきところである。女子のレディースも、今後さらに普及を進めていきたい。

JFA として全国大会の設立やサポートはもちろんであるが、各 FA における大会をどのように展開していくか、都道府県の状況に合わせて考えていく。

⑥ 障がい者サッカー

障がい者サッカー連盟（JIFF）と協力し、障がい者サッカーの支援をさらに進める。

指導者、審判等の養成も含め、サッカーファミリーへの障がい者サッカーへの関わりを促進する。

6．各種連盟のサポート

2018 年には、二巡目となる 1 億円 47FA＋被災地 3 県 5000 万ずつの 48.5 億円の積立、JFA ナショナルフットボールセンターの 40 億円の積み立てが終わる。また、JJP の 5 億円（一部は J リーグと協議の上サポートを継続）が終了する。それに伴い、2019 年からは新たな規模の事業が展開できるようになる。これによって大きな事業を始めるチャンスとなる。各種連盟のサポートを検討していく。

①代表選手の母体となる所属へのサポート
代表チームの出身母体を考えると、中体連、高体連、クラブ、大学へのサポートをしっかりしていく必要がある。スキームの変わる 2019 年以降、予算を確保し、代表選手を育成してくれた団体・クラブに対しその育成に報いていく。

② 高体連、中体連
日本のサッカーを支えてきているのが学校体育である。現在の代表選手達（※0831 ワールドカップ予選）の出身を見ると、中体連 50%（クラブユース連盟を入れると 58%）、高体連 54%（クラブユース連盟を入れると 58%）と半数以上を占めている。
しかしながら、少子化の中、新たに教員となり、サッカーの指導をする者が減りつつある。また、熱心に指導をしている教員に対し、今の働き方改革の中では社会の風潮は逆風となっている。
本来、朝からすべての授業に関わり、家庭環境も理解し、学業、他の面においても子ども達の多くを把握し働きかけている教員が部活動の指導をすることは望ましいことである。しかし現在それ自体を否定するような環境もあり、部活動の指導者が活動しにくくなってきている。
真っ先に考えなければならないのは、日々自分の時間も削って部活に従事している方々を応援する体制をとることである。
スポーツ庁は外部指導者および部活動指導員を導入した。どうしても部活を面倒見てくれる教員がいない学校においては、適切な外部指導者および部活動指導員が土日の試合やウィークデーの練習をしっかり見ることで MTM(註) を実践できる者が外部指導者として認められ指導をしていくべきである。
日本サッカー協会のライセンス取得者がその任に当たることを促進し、指導者養成の面から支援していく。
（Match-Training-Match：試合から課題を抽出し、それに基づいてトレーニングを行い、また次の試合をより良いものにすべく臨んでいくこと）
日本の制度においては、トレーニング費用が中体連、U-15 のクラブには支払われていない現状である。
J リーガーを育てることは、中体連、クラブにとっては誇りであり、額の大小ではなくしっかりと支払われる仕組みを構築し直す。

③ 少年団・U-12 クラブ
日本の制度においては、トレーニング費用が少年団、U-12 のクラブには支払われていない現状である。
J リーガーを育てることは、少年団、クラブにとっては誇りであり、額の大小ではなくしっかりと支払われる仕組みを構築し直す。
U-17 の TSG から、U-10 の年代からの指導を向上させることが急務である。トレセン制度も含め、技術委員会がこれに取り組む。

④ クラブユース連盟
学校体育における部活動の将来的な方向を考えると、ますますクラブユース連盟の役割が大きくなる。クラブを増やす障害になっているものを分析し、サポートする。

トレーニング費用についても、クラブに支払われるよう、構築し直す。

⑤ 大学連盟

現在のＪリーグの構成を見ても大学出身の選手の占める割合は多い、重要な連盟である。
ユニバーシアードは男子優勝、女子準優勝であった。ここの強化をサポートする。
トレーニング費用が大学に適正に支払われるよう、構築し直す。

⑥ 社会人連盟

2016/2017　　社会人連盟の大会改革

大きな改革を社会人連盟が実現してくれた。多くの社会人チームの理解を協力に感謝する。
社会人連盟の登録数の減少に歯止めをかけるために、しっかりとした分析を行い、施策を講じる。
登録制度の見直しを検討し、国体改革とも関連させていく。

⑦ JFL

アマチュア最高峰のリーグとしての価値を認識し、その発展をサポートしていく。
海外遠征等の実施のサポートをすることにより、選手の強化、モチベーションアップ、JFL の国際化へもつなげていく。

⑧ プロサッカー選手会

年金制度の実施について、まず日本代表選手に対し、年金に準ずるサポートを開始する。
現役選手の指導者ライセンス取得をさらに促進する。

７．日本サッカーの発展を担う人材、世界で活躍する人材の養成

①指導者

2016/2017　世界で活躍できる指導者を養成するために、JOC、JJP、後援会等の協力により海外への研修を実施

全国の指導者の質が、育成の質、その国のサッカーの質を決めると言って過言ではない。
全国のグラスルーツからエリートに至る指導者のレベルアップ。
U-17, U-20 の TSG からのフィードバックより、指導の質と選手発掘の基準を見直す必要がある。
Ｊリーグ、47FA、各種連盟と協力し、レベルアップを図る。

②審判

2016/2017　RDO の配置（2 地域）

世界トップレベルで活躍する審判員、ワールドカップレフェリーを継続的に輩出する。

そのためにも、全国でシステマティックな発掘・育成システムおよび体制の確立、ブラッシュアップを重ねる。
ユースレフェリーの再教育と発掘を推進する。
RDO の配置を進め、各都道府県、各地域での１級審判員の養成を促進する。
世界の動向を踏まえ、VAR（ビデオアシスタントレフェリー）、AAR（追加副審）導入を対応していく。

サッカー界の重要なステークホルダー代表として、指導者、審判の組織化を行う。

③女性人材
サッカーの様々な分野で女性が活躍し、日本サッカーの発展に貢献するよう支援する。
意思決定機関等への女性の登用を行う。
世界で高い評価を受けている日本女子サッカーが、アジア、世界のサッカーの発展に貢献するよう支援する。

８．日本サッカー協会の役割

① 組織体制、ガバナンス、コンプライアンス
2016/2017　**定款、基本規程をはじめ各種規程の整備**
内部統制制度の整備（会計監査人の配置、内部通報制度の整備、啓発のためのハンドブック制作）、
理事会通信
予算等のわかりやすい情報共有
ウェルフェアオフィサーの養成（47FA, 9FA、連盟、JFA）
法務相談サービスの開始
人事制度の見直し

2016/2017 で、JFA のガバナンスは大きく整理されたと言える。
サッカー協会は公共性が高く社会的責任の大きな組織であり、透明性のある公正な組織運営を行っていく必要がある。ガバナンス、コンプライアンスの徹底には引き続き取り組んでいく。
理事会通信により、多くの人々に理事会の内容、活動を理解していただくことを継続する。
予算や決算について、グラフ等を使いわかりやすい情報共有を行い、適切な実行につなげる。
リスクマネジメントを考え、代表チームのみに依存しない安定的な収入の確保。
ウェルフェアオフィサーを推進し、安心安全なサッカー環境を守っていく。
選挙制度について、岡田副会長を中心に検討を行い、新たな方法を理事会で承認した。しかしながら、FIFA からの了解はまだ得られず、今回は前回と同様に行うこととなった。今後、岡田検討会の結論を基に、日本サッカー界にとって最適な会長選定方法を FIFA と協議し、２年後の実施を目指す。

② 社会貢献活動の継続

AFC ドリームアジア受賞を受賞した。これはこころのプロジェクト、グリーンプロジェクト、巡回指導をはじめとする社会貢献活動が評価されてのものである。これを確実に続けていく。
社会貢献活動の充実によって、サッカーのさらなる価値向上を目指す。

③ 国際サッカー界におけるリーダーシップ、貢献

FIFA, AFC 等世界の動きをいち早くキャッチし、積極的に関わり、対応していく。
海外指導者派遣を継続して進める。
日本のノウハウを、アジア、世界と積極的に共有するために、コーチングコース、レフェリーコース、アドミニストレーションコース等の開催を継続する。
海外の組織へ、人材を積極的に派遣する。
J クラブの ACL 出場チームへのサポートを継続する。

④ 百周年に向けて

2021 年に JFA は百周年を迎える。百周年記念事業委員会において、既に検討を開始している。
この機に歴史を整理し、過去の百年の歴史に感謝するとともに、次の百年に向け、日本サッカーの志を世界に発信する。
レファレンス機能としてのミュージアムを充実させる。

⑤JFA フットボールセンター

業者の選定を終了し、建設向けて始動した。完成後の日本サッカーの拠点としての有効活用に向けて計画を進める。

⑥J ヴィレッジの復興

2017 年 9 月理事会を実施、現地視察を行った。
ソフト面での支援として「夢の教室」の浜通りでの実施。福島県との連携でポット苗事業の推進。
2018 年プレオープン、2019 年のオープンに向け、サポートしていく。
男女のオリンピックの強化拠点とすることが決定している。

⑦ リスペクト

「リスペクト - 大切に思うこと」を日本サッカーの最重要の価値として、大切にしていく。これを継続することが、サッカーの価値を高めることにつながり、我々のあらゆる活動の根幹である。

日本サッカー協会は、理念を忘れることなく、理想を追求していく。
サッカーを文化にする。

※ 1 ページに収めらない場合は、適宜追加して下さい。

（2）提案するプログラム　　氏名　田嶋　幸三

1．日本サッカー協会の存在意義とサッカーの価値の向上、発信

・「JFA2005 年宣言」の理念、ビジョンの、サッカーファミリー、日本社会への発信

・日本サッカー協会の存在意義を自覚し、常に努める

・タウンミーティング、9 地域協会訪問、各種委員長会議、トレセン、指導者養成研修会等で、JFA の存在意義と価値の向上についてあらゆる機会を活用してサッカーファミリー、日本社会へ伝えていく

・クレドカードの作成、サッカーファミリーへの配布

2．47FA の自立的発展

・47FA 還元金の 2019 年度以降により良いものにしていくための検討

・サポートの継続強化、各 FA の実情に合わせた個別サポートによる 47FA 自立的発展の支援

・制度・情報の整理と共有、有効活用による施設整備の個別かつ詳細なサポート

・JFA 事業の FA 開催による発展の促進

・人材交流の促進

・タウンミーティング、応援会議、応援団活動等による様々なステークホルダーとのコミュニケーション。意見を吸い上げ改善につなげる

・9 地域 FA のより良いあり方の検討

3．魅力ある代表

・SAMURAI BLUE、東京 2020 代表が成果を挙げるよう、可能な限りのサポートを行う。

・育成年代が世界の真剣勝負の場で戦うことを重視し、国際経験をはじめ強化のサポートを行う。

・育成世代から、代表選手としての責任や誇りを教育する。

・チーム関係者や TSG からのフィードバックとその有効活用

・医科学のさらなる活用によるレベルアップを図る。

女子

・なでしこジャパンのワールドカップ、東京 2020 で好成績をあげるための強化の支援。

・女子構造改革

・女子国体少年女子の部創設の実現

・女子ワールドカップ 2023 招致

フットサル、ビーチサッカー

・世界大会に出場し続けるポジショニング、そのための強化支援体制の維持・強化

・そのためにも、グラスルーツにおいて競技人口増を目指し、普及を図る

・トップレベル日本人指導者を育成

・フットサルワールドカップ 2020 招致

4．育成日本復活

・トレセンのさらなる充実、質の向上

・指導者の質の向上。研修会の充実
・U-10、12、14年代の指導の向上。発掘の基準の再検討
・海外の育成から積極的に学び、日本の方法をブラッシュアップしていく
・選手情報の把握・有効活用
・47FAYD専任化を促進。やりがいをもって臨めるようにする。
・トレーニング費用の再構築

5．グラスルーツ　フットボールファミリーの拡大
・四種登録減少を食い止めるため、キッズ年代を中心とした活動を活性化させる（巡回指導等）
・登録人口減少をさらに分析し、積極的に施策を講じていく
・登録制度全体の見直しを検討。プロジェクトを立ち上げる
・登録上のメリットを充実させ、明確に伝えていく
・学校での指導環境の支援。部活動の指導環境を様々な面からサポートしていく
・学校体育での指導プログラムの推進
・女子の普及を進めるために、国体少年女子の部創設を進め、中学生年代の課題解消
・部活動指導者の支援
・教員向け研修会。部活動指導者、外部指導者向け研修会の実施
・グラスルーツレベルでのメディカルマネージャーの検討

6．各種連盟のサポート
・各種連盟支援。2019年度からのスキーム変更に向け検討。

7．日本サッカーの発展を担う人材、世界で活躍する人材の養成
・世界基準での指導者養成の推進
・指導者海外派遣
・ワールドカップ審判の継続的輩出の支援
・審判RDO配置のさらなる推進で地域での活動の活性化
・指導者、審判の組織化
・女性人材の登用

8．日本サッカー協会の役割
・ガバナンス、コンプライアンスの徹底
・ウェルフェアオフィサーの推進
・人事制度改革
・リスクマネジメント
・「こころのプロジェクト」をはじめとする社会活動のより一層の充実
・FIFAカウンシルメンバーの継続的輩出
・国際サッカー界への積極的人材派遣

・日本のノウハウの海外との積極的共有
・百周年を実り豊かなものとすべく、しっかりとした計画を立て準備
・JFA アウォーズの新設。2021 年の百周年に合わせて準備する。
・サッカー文化の発信、レファレンス機能としてのミュージアムの活性化
・JFA フットボールセンターの有効活用に向けての検討
・J ヴィレッジのオープンに向けた支援

リスペクト － 大切に思うこと

・リスペクトの一層の推進

※　1 ページに収めらない場合は、適宜追加して下さい。

（3）その他

氏名　田嶋　幸三

①最終学歴（中退を含む）

1987年　3月　31日	筑波大学大学院修士課程体育研究科コーチ学専攻　修了　　卒業・中退

②生年月日

生年月日	1957　年　　11　月　　21　日 ※2018年3月24日における満年齢　60　歳

③職業・勤務先

職業	スポーツ団体役員
勤務先等	公益財団法人 日本サッカー協会
所属・役職等	会長

④会長の改選期の直近5年間のうち2年以上、本協会、地域サッカー協会、都道府県サッカー協会、Jリーグ、各種の連盟、リーグ、クラブ等の役員、職員、選手、審判、指導者、その他サッカーと関わりが深いと認められる立場で、サッカー界において実質的に活動し、貢献していることについての記述

JFAには1992年指導委員会委員会より関わる。U-17代表監督、技術委員長、常務理事、専務理事を初め、各種委員を歴任。
直近5年間に限定して言えば、以下の通り。
2012年6月より副会長専任。2016年3月より会長。
日本サッカーを代表して以下の国際的役割を果たす。
2011年3月より、小倉名誉会長の後任としてEAFF副会長。2016年4月より会長。
2011年1月より2015年5月、AFC理事。
2015年5月末より、アジアサッカー連盟代表FIFA理事。2016年6月よりFIFAカウンシルメンバー。現在に至る。
アジア、世界における日本サッカーのリーダーシップを、前任者の後を継いで務めている。
AFC理事として、技術委員会委員長。
公認S級指導者。
フットボールカンファレンスにて講演　2013年、2015年、2017年
S級指導者講習会にて毎年講義。

以上